「満州」における「からゆき」救済事業

――益富政助と満州婦人救済会をめぐって（2）

倉橋克人

はじめに
一　満州に赴くまでの益富政助
二　「からゆき」との遭遇（以上、本誌前号）
三　大連教会の創立と満州婦人救済会

満州における益富の配属地は、大石橋、遼陽、奉天、旅順、さらには、鴨緑江軍が駐留する凰城、水稜など、一定したものではなかったようであるが、[84] 戦争が終結したのを受けて、一九〇六年の早い時期には、大連に移動していたものと思われる。そして、この地で彼は、かねてより素懐していた「からゆき」に対する救済事業に着手するのであったが、そこに至るまでのプロセスについては、先行研究では、ほとんど触れられてはいない。そこで本節では、この点をめぐって明らかにしたいが、それに先だって、それまでの大連における居留日本人の動向について、概略を辿っておきたい。

そもそもこの土地は、青泥窪湾に面した一寒村に過ぎなかったが、一八九八年の天津条約によって、営口とともに開港地となっていたこの地をロシアは租借地にして、ここを、「遠方」を意味する「ダーリニー（ダルニー）」と命名した。その後、日露戦争が勃発し、この地を戦闘要員や軍需物資の搬送にとって最重要の拠点と位置づけた日本政府は、〇四年五月に、陸軍第二軍を遼東半島に上陸させて侵攻し、同月末には、ダーリニーは、日本軍によって武力制圧されることとなった。

その後、戦局は、満州のほぼ全土に拡大して、日露両軍の間で死闘が繰り広げられることになったが、戦争の遂行にともなって、この地の兵站地としての軍事的役割は、一層、大きなものとなり、[85] 戦争景気に乗じて、日本から密航してくる者も続出した。その一部は退去処分になったが、通訳としてや、軍用達商に雇われるなどして、ある程度は、軍当局から在留が黙認されていたという。[86] そして、翌〇五年一月二日に旅順が陥落すると、その二日後の一月四日に、陸軍省は「大連湾出入船舶及渡航商人規則」を発布して、制限付きながらも民間人の渡航を許可し、[87] これ以降、この地には、雑貨商をはじめ、土木建築請負業者や写真屋、理髪業、飲食店など、多様な業種の日本人が流れ込むこととなり、彼らは建築ブームの中で、軍政署の庇護のもとで、ほとんど独占的に経済活動を展開することとなった。[88]

さらに、翌一九〇五年一月二七日に満洲軍司令部は、遼東守備軍令（令達第三号）を発して、ダーリニー（青泥窪）を、翌二月一一日の紀元節を期して「大連」と改称し、同月二二日には、それまでの青泥窪軍政署を大連軍政署に再編して、本格的な都市建設に邁進していったが、早くも五月五日には、大連在留の日本人の親睦団体である大連市居留民会が結成されている。そして、この年の九月に、満州への民間日本人の全面的な自由渡航が許可されるや、大量の日本人が合法的に来住することとなって、大連は、関東州に居留する日本人全体の四割強が集中するまでになったのである。[89] そして、旅順、営口とともに開港地であり、満州の内陸地に通ずる東清鉄道の起点でもあったこの地には、

渡航してくる娼婦たちも急増し、その殺到たるや、「便船毎に続々日本人醜業婦の入込む有様」であったといい、[90]「大連における紅裙隊の勢力凄まじとも凄まじく真に驚嘆の外なし、天晴有髯男子をして後へに瞠若せしむ」と伝えられるほどであった。[91]

さて、日本のキリスト教による海外伝道は、既に領有地となっていた台湾や、朝鮮半島、中国大陸に在留する日本人を対象に行なわれていたが、[92]満州における宣教活動は、日本基督教会によって先鞭がつけられることとなる。

先述したように、一九〇四年二月に日露戦争が勃発するや、日本のキリスト教各教派は、それぞれの大会決議において戦争支持の態度を鮮明にしたが、益富が属していた日本基督教会も、四月一一日には、伝道局内に戦時伝道部を特設することを決定して、[93]「戦時に於て広島佐世保等特に伝道に必要なる場所を選び出来るだけの伝道をなすこと」、「明治学院、東北学院、聖書学館、横浜偕成女学校等に交渉して男女の神学生を遣はし戦時特別伝道をなさしめること」、「東京日本基督教会聯合婦人会及び全国婦人会に交渉して伝道的運動をなさしめること」、「日本基督教会の信徒にして出征せる軍人及び其の家族に対し冊子を送り或は慰問状を呈すること」、さらに「九、十、十一の三ケ月間戦時巡回伝道を全国に試むること」等の行動計画を打ち出している。[94]

以後、この戦時伝道部は、東京をはじめ、全国各地で戦時伝道演説会や連合祈祷会を開催するとともに、[95]陸海軍病院を慰問したり、さらには、国内の要地、及び台湾にも慰問使を派遣して、出征軍人とその家族を慰籍するなどして、銃後の戦争協力についての、一層の奮起を喚起した。

そうした折りに、その頃、天津日本基督教会の設立にも寄与した経緯のある陸軍二等主計の日疋信亮が、[96]第一師団経理部満州軍倉庫部長として、天津から大連に配属されることとなった。転任するに当たって日疋は、直接、東京の伝道部の本部を訪れて、軍倉庫部の雇員として渡満することを希望する信徒の募集を要請したところ、一五名の志願

者があった。そして一行は、この年の八月一九日に、日疋に引率されて大連に上陸し[98]、その後、軍務に従事する一方で、「倉庫本部内ノ一室ニ会シ日曜ノ礼拝及金曜ノ祈祷会等集リヲナシ互ニ奨励シテ陣中ノ生活ヲ続ケ」[99]ることとなった。さらに、一〇月には、当時、営口の満州軍倉庫で通訳をしていた丸山伝太郎が来援し、「営口支庫長金子義友及支庫員江口管太郎等ト率先シテ大連ト相呼応シ倉庫内ニ於テ集会ヲナシ礼拝祈祷伝道ヲ開始」している[100]。

こうして誕生した信徒たちのグループが、大連に教会が設立される礎となったのであるが、その間の事情を記録する『大連日本基督教会創立沿革史』（以下、『沿革史』と略す）の「一九〇四月一二月」の項目には、次の記述がある。

同年十二月基督教青年会軍隊慰労部天幕事業部神学士落合吉之助等大連ニ来リ其事業ヲ浪速町ニ開始セラルヽヤ日疋倉庫長ハ部下基督者一同ヲ指導シテ大ニ此便宜ヲ与ヘ其事業部等ノ設備ハ完成シ爾後軍務ノ許ス限リ其始業ヲ補助セリ且其部内ノ一室ヲ請ウテ之ヲ假用シ基督者ノ集会ニ供シ主事ニ説教ヲ嘱託シ伝道ヲ開始セリ此集会ハ大連ニ来ル所ノ新教ニ属スル基督者ヲ招致シ教派ノ異同ヲ論セズ一室ニ会シ互ニ奨励シテ信仰ヲ錬磨シ三位一体ノ神ヲ礼拝讃美シ進ンデ伝道ヲナスニアリ故ニ戦地ニ来タルヽ教師牧師アルトキハ之ニ請フテ其属スル所ノ教会ノ礼典ニヨリ礼拝祈祷会聖餐ヲ受クルコトヲ協定ス（傍点引用者）[101]。

この記録を通して、日疋を中核とした、軍倉庫部で勤務していたキリスト者たちが、この年の一二月から市内浪速町で活動を開始していた基督教青年会の軍隊慰問事業に協力し、営繕面をはじめ、活動の実際についても、さまざまな便宜供与をしていたことが窺える[102]。それとともに、それまで倉庫本部でもたれていた集会の会場を、青年会の施設の側に移し、他方の、天幕事業に携わっていた青年会の主事たちも、礼拝説教を担当するなどして協力していた様子も、あわせ看取される。

ちなみに、先述したように、同盟の軍隊慰労部委員長であった江原素六は、この翌〇五年の五月に各地における天幕事業の実際を視察しているが、大連における活動をめぐって、「大連では今井君を始めとして、二、三の青年が当事者であるが、茲処は他と比較して多少の異彩を放つてゐる」として、「日曜日の夜分は兵士の中の基督教信者の為めに、真正なる宗教的集会を開ゐて、彼等の霊性上の修養に怠らないのである。信者は元より、其以外のものも不思議に集ひ来りて、信者は陸続、増加して行く有様である。思ふに此の夜分の集会は、必らず特別の効果を齎すに相違ない。即ち、霊性上に与へらるゝ功徳は、恐らく、顕著なるものある可きを疑はないのである」[103]と伝えている。かくしてグループ内に、高揚する伝道熱のもとで、次第に、教会設立に向けての気運が高まっていったのは、自然の成り行きであった。

ところで、この年の一二月に、日本基督教会伝道局は、宗教視察を目的に、幹事の貴山幸次郎を朝鮮、及び中国各地に派遣している。これは、当時、日本の植民地となっている韓国と、占領地となった満州南部の諸都市に在留していた日本人を対象とする伝道の必要を覚え、それまでの天津、釜山の両市に加えて、新たに、京城、群山、大連、営口、安東県、旅順を伝道地に選定して、各地に定住の伝道者や宣教師を派遣することが決定されたことによるものであろう。[104]

当初、貴山は大連を訪問する予定はなかったようであるが、朝鮮南部の巡回応援中であった彼に対して、その情報を入手した日疋から、教会設立の準備のために渡満することを求める打電があり、急遽、貴山は、伝道局本部と交渉して、彼の要請に応じることにした。

貴山が大連に到着したのは、一二月一〇日のことであった。彼は、直ちに満州軍倉庫本部を訪問するとともに、一五日には教会創立の相談会に参加して、教会規約の作成などの指導に当たった。[105]そして、その翌一六日には、大連日

本基督教会の創立総会が開催の運びとなり、貴山の司式で、洗礼、及び聖餐式が執行され、佐野会輔、増田宗之助、高橋喜七の三名が受洗している。ちなみに、この時、受洗した三名のうち、佐野は満州倉庫本部一等主計であり、高橋は大連要塞司令部の配属将校であって、いずれも軍関係者であった。[106]

かくして教会の創立が果たされ、専従教職者の選定、及び派遣などの問題は、貴山を介して日本基督教会伝道局に一任され、翌〇六年一月には、特派教師の石田祐安（すけやす）が来援して、三月上旬までの期間、礼拝説教などを担当している。[107] 教会のメンバーの宣教に対する熱誠は強いものがあり、先の『沿革史』によれば、創立後、「教会内ニ青年会ヲ設ケ尾崎齊ヲ会長ニ選任シ青年ノ修養及伝道演説ヲナス」、一二月には「岡山孤児院其音楽隊及活動写真隊ヲ派遣シ義捐金募集ノ挙アリ日疋信亮専ラ之ニ当リ教会々員モ之ニ参与シ貳千六百有余円ノ寄附ヲ同院ニ送附セリ」とあり、[108] さらに四月に入ると、「東北地方凶饉ニ付義捐金募集ノ為メ祈祷会ヲ開催シ（中略）遼東新報社ニ交渉共同シテ其事業ニ尽力シ壹千八百六拾五銭ヲ醵集シ宮城縣知事ニ送附セリ」といった記述が続いており、青年層に対する修養や慈善活動にも熱心な姿勢が窺われる。

次いで、同書に収められている「執事宛」の四月分の欄には、以下の記録がある。

青年会ガ主唱シ当教会ト共ニ経営セシ婦人救済会事業ヲ全ク引受ケ益富政助ヲ主任トシ教会ノ事業トシテ之ヲ専管シ誘拐セラレシ婦女子及寄ルベキナキ婦女子ノ修養ニ務メ大方ノ賛助ト警察官ノ保護トニヨリ業務ヲ遂行シ後之ヲ救済世軍ニ引継タリ其引継ノ際内地送還及正業ニ従事セシメシモノ外現ニ収容婦女ハ十八名及ビ之ニ所要ノ家屋物品及現金六百拾余円アリタリ（傍点引用者）。[109]

略記ながら、この記述を通して、救済会が設立されるに至った経緯が、教会の創立を前後して、先ず青年会によっ

て活動が始められ、その働きを教会のメンバーがサポートする形で運営されていたのを、この年の四月に、改めて教会全体の事業活動として位置づけられたものであったことが知られる。

なお、この間の実情については、この時期に、山室軍平が『ときのこゑ』に報告した文章の方が、より具体的に、事の次第を説明している。山室は、その中で「いつぞや誘拐されて満洲に行て居つた、十三才と、十四才と、十五才の三人の少女が我が婦人救済所に引取られたること、又其後一人の二十七八才になる婦人が引取られたる」こと、さらにその後、新たに「二名の十五六才の少女が救世軍の保護を受くる」ことになった事情を伝えた上で、救済会の活動に対して、次のような多大な期待を寄せている。

（前略）此二人も其始めは悪漢に誘拐されて彼地に行きたるものにて、例に由て彼等の不慈悲、残酷なる陥穽にはめられ大外た業に身を委ねさせられて泣の涙に日を送る有様を任侠なる基督信者と、其筋の人に見現はされ、其救護を受けて自由の人となり先頃其地より帰朝したる牧師石田祐安氏に伴はれて無事、我が婦人救済所の世話になることとはなつたものであります。それと同時に満洲にては、これ迄青年会の天幕事業に従事し居れたる益富、西内、米澤、池田、三宅諸氏が打寄て協議をなし「満韓婦人救済会」といふを設立し此際、多くの気の毒なる婦人達を救済し之を我が救世軍の婦人救済所に托するの計画を立てられました。（中略）民政長官、警務部長、遼東新報社は同情を以て之を援けられ、奉天の英国宣教師ウオータース氏は此目的の為に金六百円を寄附すべきことを予約せられたと申すことである。尤も前記天幕事業に従事せられたる諸君は追々帰国せらるべく、然とて救世軍に於ては今暫く其為めに特別の士官を其地に派遣することが出来難い事情があり此特別運動の前途が何うなることか、今少し未定である。私し共は切に其成功を希望して止まぬ者であります。併し満韓何地からでも送り届けらるべき不幸な婦人は、何ぼうでも引受て保護する丈の覚悟は救世軍に出来て居こと故、何卒此満韓婦人救済会の目的の満足に成就せんことを切に祈つて居ます。(10)

この山室の文章によって、救済会の設立の目的が、救済された女性たちを、近い将来に救世軍に委託するに当たって、一時期、彼女たちの身柄を保護するための、緊急避難的なものであったことが窺われる。さらに、設立にあたっては、当時、奉天に在住していた一人のイギリス人宣教師からの篤志が、活動基金として寄せられたこと[111]、また、活動の運営の実際に当たっては、民政署や警察当局等の大連の官庁をはじめ、地元新聞の遼東新報社[112]の支援が寄せられていたことが知られる[113]。なお、『遼東新報』の記者であった柴田博陽は、ルポルタージュを通して、積極的に救済会の働きを紹介するとともに、後述するように、この翌年には大連教会で受洗して、益富が大連を離れた後も、「からゆき」の救済事業を支えてゆくことになる[114]。

ところで、大連教会が創立された同月の二六日に、大連における最初の遊廓地である逢坂町遊廓が、関東総督府によって設置されている。先に述べたように、この年の九月に、満州への民間人の自由渡航が全面的に解禁されると、多くの日本人娼婦が大連に流入することになったが、それにともなって、妓楼ばかりではなく、市街のいたるところに「私娼窟」が散在して、そこに日本人兵士や労働者が蝟集するようになっており、その様相たるや、さながら「人肉販売所」[115]といった観を呈するまでになっていた。対応に苦慮していた総督府は、風紀粛清と治安の保持を図るために、それまで市中で営業していた貸座敷業を、市郊外の南山西南麓地に移転させる集娼政策を断行して[116]、この土地を、同月二六日に「逢坂町遊廓」として指定するとともに（「遊廓地設定竝名」関東州民政署告示第三八号）、「娼妓取締規則」と「貸座敷取締規則」を、あわせ布告したのである[117]。

けれども、この遊廓の設置の目的は、そればかりではなかった。そもそも同遊廓の発端は、民政署によって指定される五ヶ月前の七月一五日に、大阪の田中惣一という業者が、当時、大連に駐留していた遼東守備軍の神尾光臣参謀

長からの要請でこの土地に妓楼を築造したことによるものであったが、その経緯について、後に『満洲日報』は、次のように報じている。

三七年五月以降任に軍政官として治政の衝に当られたるを今の神尾中将とす時の満洲軍参謀総長児玉大将軍隊に花柳病多きを目撃され之を防ぐの道公娼を允すの優れるに如かずと即はち神尾軍政官に語るに事を以てす旨を受けたる神尾軍政官は窃かに画するところあり偶ま大阪の富豪田中惣一氏に議る田中氏始め少しく躊躇の色あり後に至り意漸く決し二十万円の資を投じて一遊廓を建設せんとし（中略）八千坪の土地貸下許可を得たるは三十八年七月の事なり而して妓楼を建設したるうち大なるもの三、中なるもの七、小なるもの五合計十五軒之れが建坪合計六百坪之れに要したる建設費一坪平均百二十五円其他の工費を投じたるものを合算すれば約八万円弱なりとす（傍点引用者）[118]。

かねてより、軍部にとって性病対策の問題は、兵力の減耗を防ぐためにも焦眉の課題となっており、そのために遼東守備軍は、私娼と兵士たちとの性的接触を防止するために、「内地」と同様に、娼妓の登録や性病検査（検黴）を義務づけることができる管理体制を確立する必要に迫られていた[119]。逢坂町遊廓の設置は、そうした軍当局側の意向も、強く反映されていたものと思われる[120]。

それでは、この時、軍の関係者が多かった日正ら大連教会は、この逢坂町遊廓の設営を、どのように受け止めていたのであろうか。益富は、後年になって、次のように述懐している。

私は（中略）明治三十七八年の日露戦争に、日本軍の為めに軍隊慰問使として、満洲に二年計りいつて居たが、戦争も終末になつ

て、軍隊が凱旋すると、それと引換に娘子軍は潮の如くに押寄せて来て。何処も彼処も、日本の料理屋、その実妓楼を見ない処がないまでになつて終つた。満洲には最初関東民政署と云ふものが出来て、（中略）石塚栄蔵氏が初代の民政長官になられたが、この関東民政署の署令の第一号が、料理屋、娼妓取締の規則であつたのを見ても、その有様は解ると思ふ。これを見て、当時満洲軍の主計監であつた日疋信亮氏が、大きな家が出来るから、学校でも出来るのか、或は工場でも建てるのかと思つて見て居ると、それが皆女郎屋であつたと歎いて居た。外国人が新らしい土地へ行くと、最初に教会、それから学校、病院と云ふ風に建てることになつて居るが、日本のは最初に女郎屋と料理屋の建設であると、感歎された。[21]

益富は、これに続いて、「私はさう云ふ処を見せ附られたので、その当時は黄吻の一青年であつたが、国家の為めに一大事だと思つて、婦人救済事業を起した」と述べている。つまり、救済会が設立された契機の一つには、逢坂町遊廓が設置されたことに対する憤嘆もあったのである。[22]

四　救済会の活動の実際

こうして、当初、青年会の発意で始められた「からゆき」の救済活動が、一九〇六年四月に、大連教会の付帯事業として改めて位置づけられることによって生まれた満州婦人救済会であったが、主任となった益富らは、自分たちの働きを、日本国内に広く知らしめ、支援と協力を訴える目的で、趣意書を作成した。その全文は、翌五月の『婦人新報』に掲載されており、その中で、事業に対する抱負が、次のように披瀝されている。

日露戦争は光栄あるわが国の勝利に帰し、従つて正義人道の威力の偉大なるものあるを知らしむると共に、我邦の満洲文化に及ぼす責任の洵に重大なるものあるに到るを認む。然るに戦争開始以来、或は陰に密航し、若くは陽に渡航し来る、醜業婦の総数無慮一万以上に達し、今や大連のみにても公娼ならザル売春婦、優に三千人を超ゆる有様なり、而して民政署警察部の調査によれば、其三分の一は我邦法律が明に厳禁したる未成年者の少女なりと云ふに到つては、洵に驚くに堪たる恨事にあらずや、斯の如き醜業婦を食物み為せる猛悪なる醜業者の跋扈は、満洲人男女間の道徳に開闢以来の悪感化を及ぼせし事実は、応々にして途上を歩する我邦の貴婦人に、非礼を加るに見るも明白なりと謂ふ可し。[123]

続いてこの趣意書は、満州で売娼に関わる女性たちが急増している実情を、「日本帝国の体面を汚すこと」、「我邦人の道徳の程度が満洲人にも及ばざることを示すこと」、「健全なる国家の膨張を害ふこと」、「醜業家の力によりて満洲移民を成功せんとするは恰も暗黒の中光明を求むるが如きものなること」、「満洲に醜業婦の渡航を禁ぜざるは、明治政府の根本的殖民政策の誤謬なること」、そして「満洲に於ける道徳的経営は、我邦が露国以上の道徳的実力の有無を、世界に明白ならしむる国際道徳上の試金石なると共に、今や大なる失敗を為しつゝあることを示すもの」の七項目にわたって指弾し、その上で、「欧州には醜業婦の密航をすら厳禁しつゝあるに、満韓には時に之を奨励するが如き光景を現はすは明治政府の道徳的生命が半身不随の状態であることを示すとともに、観過す可らざる一大矛盾なることを示すもの、若しそれ進むで満洲の荒野に誘拐せられたる無数の少女が、猛悪なる痴漢の為に無垢の純潔を捨て売られむとして、時に身を大連湾頭に投ぜずんとする者の幾千なるかを実見するに到つては、洵に心胆の寒きを感ぜずんばあらず」と嘆じている。さらに、「我救済会は単に殖民政策の欠陥を救ふのみにあらず、彼等の為に身を挺して、之を救ふにあらざれば、同胞としての胸中の悲痛を医する能はざるものあれば也」と、活動の動機が説明されてもいる。[124]

つまり、この文面から浮き彫りにされるものは、悲惨な境遇に陥れられた女性たちを救済するとともに、満州における日本政府の殖民政策の不備と過誤を矯正たらしめようといった、強烈なナショナリズム意識に基づく使命感であった。

また、この趣意書には、救済会の活動を支える組織的基盤として、「此計画は婦人矯風会、女子青年会、又本会と尤も関係ある青年会本部、及各地婦人会の賛助を仰ぐ事」、「此目的を達する迄は、本会に引取たる者を内地人の寄附金によりて、救世軍婦人救済所、及び東京慈愛館に送りて、之を教育すること」等などの要目が掲げられるとともに、活動の情宣を行なうために、西内天行と米沢尚三郎の両名を遊説委員として「内地」に派遣することや、専従の主任者が決定するまでは、当面は、益富がその任に当たることも記されている。(15)

それでは、救済会に保護された女性たちは、それまで、どのような境遇にあったのであろうか。この年の六月の『婦人新報』に掲載された「満洲婦人救済会一覧」によれば、彼女たちは「他人に誘拐されたる者」、「親権者の許諾なき未成年者の醜業婦」、「下婢酌婦にして雇主より醜業を強いられ居る者」、「親権者より保護を依頼し来りたる者」、「深く醜業の非を悟り悔改めの念切なる者」であって、そうした女性たちに加えて、「醜業婦にあらずと雖も失業者にして困窮せるもの等」も収容されていることが報告されている。

また、同誌に転載されている『遼東新報』の記事には、発足後の救済会の働きについて、次のように報じられている。

日本青年基督教軍隊慰問所が看板を撤去せられしより新に婦人救済会の看板を浪速町の同所に掲げて尚幾千の日子も過ぎないに此微々たる事業は恰も電光の如く四辺に知られ、満洲は勿論、内地に於て最早此事業をを謳歌する様になつた。そして今日まで救助し

たる婦人も却々尠くない。惨忍なる抱主に淫行を強られて自殺せんとしたる婦人や、重病に罹りて捨られたる婦人や、異郷に来りて路頭に迷ふ婦人や、是等種々様々なる薄命女を救助したること既に非常の数である其中にて、或る者は本人の所望により内地に帰還せしめ、或る者は同会に収容し、或る者は同会監督の許に真面目なる家に預け置けり（後略）[126]。

この記事は続いて、収容されている一二名の女性たちの素性を列記しているが、では、彼女たちは、施設内でどのような暮らしをしていたのであろうか。右記の文章には、彼女たちが、昼間は裁縫の稽古にいそしむとともに、言葉使いや行儀作法などの指導を受け、さらに「精神教育」も施されている様子が、次のように伝えられている。

精神教育と云ふた所が、改めて斯様々々と言ふだけの事はない、同会に居ること其事が即ち精神的教育なのであるが、併し特に益富主事が一同を集めて折々説教を加へ、神の摂理や、人道などを説き聞かせ、日疋倉庫長、佐野主計、尾崎軍医等が時々個人として懇々彼等を諭し、丸山牧師なども亦教誡を加へるので彼等の思想も次第々々に高尚に傾いて来た（中略）収容婦人には一定の規律がある。例之は毎朝五時に起床し、六時迄に身仕舞をなし、六時より七時までは講話を聞せ、朝餐が八時で、八時半より授業に取掛るのである。而して日曜日には午前中礼拝あり、午後よりは各自随意に遊戯させるのである。故に音楽を弄する者もあれば書物を見て慰む者もあり、又監督者に伴はれて郊外に散歩し讃美歌などを唄ふて黄昏まで面白く暮すのである（後略）[127]。

このように、救済会に保護された女性たちは、益富らの教導によって、少しずつ人格的にも成長することとなったが、その経緯について『遼東新報』は、「思想の変化と云ふ者は恐しい者で、以前花柳界に居たる婦人たち此處に入りてより全然一変し、川村イシ子は入浴に行き醜業婦（マ）が白粉を塗り髪を梳るなどを見て今は殆んど嘔吐を催す様な感じ

がすると云ひ、渡邊セキ子は花柳界の話をすれば面を反けて逃げる始末である（中略）中には緋縮緬の湯文字を惜気もなく引裂く者もあれば長き袖を何時も間やら切断して筒袖にする者もある」と、彼女たちの振舞いに変化が生じていることを紹介し、「此間益富主事は一同に対して各自招来如何なる事が望みであるかと問ふた所が、一技芸の蘊奥を極めたいと云ふ者、又芸を励みたいと云ふ者、裁縫に熟練したいと云ふ者、円満なる家庭を作りたいと云ふ者、立派な婦人になりたいと云ふ者等で兎に角高尚な考へを持つて来た」と、改悛の意欲も起こっていることを伝えている。[128]

もとより、施設で暮らしていた女性たちは、いずれ出所して、何らかの形で自活の方途を見出さなければならない。この点をめぐっては、救済会の活動の主要な目的」として、「授産の道を設けて正業に就かしめ」と明記されていることにも示されている。

では、救済会は、どのようにして、そうした実用的な課題を具体化してゆこうとしたのであろうか。この点に関しては、先の「救済会一覧」に、「本会の事業として満洲女子職業学校を設立し被救済婦人に対し徳育智育を施し且其の生活の資本となるべき芸能を授く」と、将来的に、付属の職業訓練教育機関の設置が計画され、そのための規定も準備されており、それによれば、この機関には、「家政国語作法算術家庭学科簡易簿記地理歴史一班実用清英語初歩等を教授」する学芸部、さらに「裁縫弥針造花編物等を教ふ」手芸部、「電話交換手銀行会社商店雇員裁縫師等其の他女子に適当なる実業に就くの素養を与ふ」実業部、また、「看護婦及産婆を養成する」看護助産部といった四部門を併置して、さまざまな分野における職業的自立に資するように配慮されており、女性の就労問題に対する緻密な識見を感じさせる内容となっている。[129]

このようにして、設立後の救済会は、収容された女性たちに対して、さまざまな授産プログラムを供して、生計面の自立を促がしていったのであったが、益富は後に、出所後の彼女たちの境涯について、次のように述懐している。

（前略）微力なる私が神と人との力を藉りて、救済したる処の婦人の中には、目下病院の看護婦となつて病める者をいたはり、苦しむ者の涙をふきつゝ、愛の生涯を送つて居る処のものもある。或は好配偶を得て、平和幸福なる家庭の人となつて居るものもある。或は父母の膝下に帰つて誠の意味の涵養を尽して居るものもある。（中略）又或者は今猶高等女学校に入学させて居る。（中略）又一人は近い中に其の女学校を卒業し、神と人との為めに身を献げんと今準備中である。之を要するに私は私の如き罪深き者をして此の如き感謝すべき救のわざにたづさはらしめ玉ひし神の恵みに日夜感涙しつゝある。[130]

けれども、これらの女性たちは、それなりに更生が実現した例であって、それ以外の「不結果の者」や、病気のために療養生活を余儀なくされた者や、過度の苦境に耐え切れずに精神を蝕まれた者も少なくはなく、中には、施設内で死亡した女性もいた。つまり、保護された女性たちのすべてが、益富らが期待したような人生行路を歩んだわけではなかったのである。

益富は、そうした女性たちの中で、教会に付設された診療施設で見習い看護婦として働き、その後、肺炎に感染して、一七歳の若さで没することになった田村夏子のことを、『婦人新報』誌上で哀感をもって紹介しているが、[131]ここでは、この年の九月に『福岡日日新聞』に掲載された一女性をめぐる逸話を紹介しておく。

当時、一九歳であったこの女性は、この前年に、博多で売春業者によって誘拐されて、大連市羽前町の一料理屋で酌婦として抱えられる身となった。最初の頃は忠実に働いていたが、その後、病魔に冒されて、次第に症状が悪化し、「我身が果敢なさを思出でゝては気も鬱ぎ勝ち」といった、寂寞とした生活が続くようになった。その上、「突然国許から母が急病であるから直ぐ帰れとの通知があつた」が、郷里に戻ることもかなわぬ彼女は、「さなきだに恋しき故里

や母の身の上であれば……とは思ふもの、夫れさへ翼なき身には甲斐なき繰言、悩み悲しんだ果ヒステリーの気味」となった。しかし、「何処までも邪慳な楼主は仮病と称えて打擲するやら、蹴倒すやら」といった虐待を加え、彼女は、あまりの折檻の激しさに、気絶することも再三あったという。さらに、これにも飽き足らない楼主は、「二、三の悪漢を語らい、其美貌をあてに米国へか浦鹽へか売り飛さうと謀つて」いたが、それを偶然に耳にした同宿の者が、救済会に対して彼女を保護するように打診し、益富が引き取ることになったという。

救済会に収容されたこの女性は、診療施設に移されたが、病状は好転せず、いつも口癖のように、「親方さん、鳥渡其処まで行つて来ます、鑑札手に持ち大連警察へ、申し上げますお役人、自由廃業願ひます」と、悲しげに唄い出すようになっていた。「唄つては打沈み、打沈むかと見れば又ニヤ〳〵と笑みを湛ゑて『儘になるなら花月の格子、明けて輝く大連で、自由廃業、死なうと生きやうと妾一人、四百余名の酌婦の為となる』と唄ふ」この女性について、同紙は、以下のように報じている。

吁何たる悲しい身の上であらう、看護婦等も哀れに涙を催ほし『浪さん、、其唄は誰が作つて上げたの』と聞くと、お浪は腹を抱ゑて他愛もなく笑ひながら『チヨイと貴女、此れは妾の蟲が考へたのよ』と答ふ、『お母さんが恋しいの』と聞くと直ぐホロリ〳〵と涙を落して『お母さん。おッ母さん〳〵、アレおッ母さんよ！』と壁間の扁額を指さして夢中になる、而して一段沈痛な声で『情けない真に此の身は籠の鳥、せめは空飛ぶ鳥なれば、近い博多に巣をかけて、焦れて泣く声、母さんに聞かせたい』と唄ひ出す、お浪は斯の如く狂乱した胸に猶故郷！母親！といふ名を深く〳〵刻込れながら熱い血潮に恨の渦を逆捲いて居るのである。(132)

この記事は、「吁真に人世の最大痛恨事では有るまいか」と結んでいる。益富にとっても、彼女との出会いは脳裏か

ら離れることはなかったようであり、「吾々彼の枕辺にあつたものは皆諸共に袖を濡らした」[133]と振り返っている。当時、業者による「からゆき」に対する性的搾取と虐待は、なかば恒常化しており、こうした薄幸な境涯は、この女性ばかりではなく、多かれ少なかれ、彼女たちが強いられた、共通した現実であった。

五　救世軍への事業の移管について

ところで、この年の六月一日に、神田青年会館で満州婦人救済演説会が開催されている。この演説会は、国内の廃娼運動家たちの発起によって、救済会の働きに対して支援を呼びかける目的で開かれたものであったが[134]、この時の模様を、『ときのこゑ』は、次のように報じている。

（前略）此夜は西内君の満洲事情に就ての痛切なる演説の外に、婦人矯風会々頭矢島楫子女史の挨拶の辞あり。安部磯雄氏は「本能主義と芸娼妓」なる題下に節制なき生活を戒め純潔なる生活の必要を警告せられ。島田三郎氏は又「公娼と国民の品位」に就て最も切実なる演説を致されました。山室大佐も亦会の中程に「醜業婦感化」のことを論じ合せて救世軍が此度新に満洲に於る婦人救済運動を引受べきことを述べ、会衆の同情を求めまするとと立ちところに金百参拾七円の寄付があつた。内金百円はライオン歯磨の小林富次郎氏の嗣子徳次郎氏の寄付であつた。扨に救世軍が東北子女問題の為に計る所あるや、小林氏は筆始めに金五拾円を投じ、之を助けられたのであるが、今は又満洲問題の為其創業費を助けられたるは私し共の感謝に堪ざる所である。別に満洲の友人より送られたる金百円あり、彼是今日迄に金二百五十円程其為に集まつて居わけである。扨愈々救世軍が之事業の引継をなすは八月中のことなるべく、それ迄は益富氏等がこれ迄通り之を経営しつゝ待合さるゝ筈である（後略）（傍点引用者）[135]。

この記事を通して、救済会が設立されてほどなく、同会の運営が、救世軍に委託されることが打診され、そして救世軍の側も、その申し出を承諾していることが窺われる。この点をめぐって、同記事は、救済会が生まれた経緯について説明した上で、「併し乍ら之は青年会の事業として永続すべき性質のものではない故、救世軍にて引継では呉まいかとは、餘程早くから交渉のあつたことではあるが、色々打合すべき必要もあつて今日迄、何とも定まらず、延々になつて居た処、終に一二週前に至り断然救世軍に引受べきことを確定せらるゝに至つたのであります」[136]と、両者の間の折衝が、前月の下旬になって、ようやくまとまった旨を報告している。

残念ながら、この間の経過については、詳細は不明である。考えられることは、戦争の終結とともに、同盟の軍隊慰労部が活動を終了することになって、益富ら主事たちも国内に戻る運びとなり、救済会の実務を担うスタッフを確保することが困難になったのではなかろうか。また、益富にしても、当時、まだ学業を残している身であって、長期にわたって、現地に滞留する意向は持ち合わせていなかったものと思われる。[137]

こうして救済会の事業は、この年の八月に、救世軍に運営が移譲されることとなり、右記の満州婦人演説会で集められた献金一三七円余は、「醜業婦救済費」として救世軍婦人救済所に寄付されている。[138]しかし実際には、実務的な引継ぎは翌九月までずれこみ、[139]そのために益富は、予定していた帰還を一ケ月延期したようである。この時期に、満洲、及び韓国の各地を視察した井深梶之助は、救済会の働きをめぐって、次のように報告している。

大連の教会は日曜の集会以外に色々の集会をして熱心に働いて居る。又一つの注意すべき事業は婦人救済会である。是は地味な、而しながら又手広い、又中々骨の折れる仕事であるが先ず成功して居る。私の行つた時も恰度電話交換手が入ると云ふので、救済会

の婦人が四名試験を受けた処が三名迄及第してと云ふ事であつた。唯此事業の主任者として働いて居る益富君は、未だ独身の青年であるので自分も長く此の事業に従事するのは適当でないと云ふ事を自覚して居るとの事で、救世軍の方へ此の事業を譲り渡して再び東京に出でて勉強する積りであるとの事であつた。（中略）唯益富君は皆が仕事に慣れる迄もう一カ月間位留まつて、而して後帰るとの事であつた。此事業は非常に一般の同情を得て居るので、遼東新報等も能く其の事業を世に報道して呉れるとの事である。[140]

それでは、この時まで救済会の働きを支えていた大連教会は、この問題に対して、どのような対応を示していたのであろうか。先の『沿革史』に収載されている「議事宛」によれば、この年の五月には「教会内ニ大連禁酒会ヲ設立シ金子義友氏ヲ会長ニ選挙シ毎月二回演説会ヲ開会ス会員九十一名」と、禁酒運動にも取り組んでいることが記され、また、九月一日には、教会の付帯事業として、「大連商業夜学校」が、「委員日疋信亮ノ創意ニヨリ市中有力家ノ賛同」を得て開校の運びとなっており、さらなる旺盛な社会的実践が模索されている様子である。

さらにこの記録には、新規の事業として、「基督教慈恵病院」が市内浪速四丁目に設立されたことも報告されている。この病院の開設は、「委員日疋信亮乾丑太郎ノ計画ニ成リ無告ノ病者行旅ノ病人及救済会ニ関スル姉妹ノ患者等ヲ収容スル」ことを目的にしたものであったが、その責任者には、「主事益富政助主任市瀬忠次郎等擔当セラシ」とあり、開院時に入院することになった患者が、女性四名と男性二名の計六名であったことも記載されている。[141] つまり、救済会の運営基盤は救世軍に移管されることになったものの、そのために教会の社会的実践の意欲が萎えてしまったのではなく、以前にもまして、教育、医療等、広範な事業活動が展望されていたのであった。先の井深は、こうした姿勢をめぐって、「浪花町の教会、青年会、救済会は総て基督教運動の中心となつて居る」と称えている。[142]

しかし、創立以来、大連教会の中核的な存在であった日疋が、この年の九月末をもって陸軍第一師団に経理部長と

して配属され、「内地」に転任することとなり、それまで救済会の働きを支えてきた益富と日疋の両名が、ともに教会を去ることは、同時に事業の推進力が失われることを意味していた。その意味でも、教会の事業として、従前通りに、救済会の運営を保持することは困難だったのである。ちなみに、九月三〇日には教会で、日疋と益富の送別会が催され、一〇月三日午後六時発の汽車で内地に引き揚げる二人を見送りに、大連駅には、多数の信者が駆けつけたという。[143]

なお、一九〇六年一一月の『ときのこゑ』には、『遼東新報』の記事を転載する形で、救世軍が救済会から事業を引き継いだ時点までに保護された女性たちの総数が、計七三名であったと報告されている。[144] また、この記事は、収容された女性たちの救済の実績を紹介しているが、それによると、彼女たちの出身地を府県別にすると、長崎・佐賀が各一〇名で、これに続いて福岡が八名、熊本・山口が各六名、大分五名、広島四名、岡山・高知・大阪が各三名、愛媛・愛知・東京・福島が各二名、その他、鹿児島・香川・兵庫・和歌山・京都・滋賀・千葉が各一名といった分布であった。さらに、彼女たちに対する救済後の処置をめぐって、次のように記されている。

> 此人員の中同会の手により郷里に送還せし者二十人、東京救世軍婦人救済所に送りたる者九人、看護婦見習となしたる者八人、死亡せし者三人、不結果の者三人、良家の女中となしたる者四人、結婚せしめたる者二人、電話交換手となりし者三人、商家の店員となりたる者一人にして現に収容中の者二十人なり、而して此中慈恵病院に入院中の者三名ありしが同会は勿論慈恵病院に在る十餘名の患者等は今や向寒に時節に際し何れも衣類や夜具などの不足を愬ひつゝありと云ふ、世の同情者は総て同会及び同病院の為に一滴の涙を寄せられては如何。[145]

かくして、益富らが主唱して生まれた救済会は、設立後半年にして解消して、救世軍婦人救済所と改称されて、救

世軍の新規事業として再出発することになったのであるが、施設の初代監理には高野貞吉大尉が就任し、翌一九〇七年一月には、彼の後任として、山室とともに救世軍の指導的存在の一人であった山田弥十郎中校が着任した。山田は、一九一〇年一一月に東京大学殖民館に転任するまでの約四年間、伴侶の喜仕子とともに、女性たちの救済事業に精力的に取り組んでゆくこととなる。[146]

他方、大連教会は、日疋らの「内地」帰還と前後して、九月には宣教師のトマス・C・ウインが仮牧師として着任し、同月二九日付で、日本基督教会憲法によって正式に設立が承認されている。[147]その後、同教会では、一〇月四日には、日本禁酒会幹事の美山貫一が来援して禁酒大演説会が催され、同月二九日には、ウインによって柴田博陽、市瀬忠次郎ら三名の洗礼式が挙行されるなど、次第に態勢も安定することになり、翌一一月一八日からは、礼拝、及び集会の会場を、伊勢町の商業学校内に移転している。また、青年会の活動は、益富らが去った後も、大連基督教青年会として存続し、[148]基督教慈恵病院については、一〇月一日から、柴田が経営に当たることとなり、[149]その後、この病院は、性病治療の必要上、民政署の許可を受けるなどして、以降、植民地行政当局の後援を受けることになるのであった。

国内に戻った益富は、以後、さまざまな機会をとらえて、満州における日本人娼婦の問題の深刻さを世論に訴えるとともに、救済事業に対する支援を要請している。彼は、早速、一一月一五日に神田青年会館で開催された救世軍の年次大会にも出席し、[150]さらに翌一二月六日に、同じく神田青年会館で開催された「満州婦人問題演説会」には、弁士として登壇して、「満洲に於ける日本人醜業婦に対する英米人特に支那人の世辞」と題して演説を行なっている。[151]

その後、明治学院を卒業した益富は、一九〇七年に東京基督教青年会の宗教部主任に奉職し、[152]翌〇八年九月には鉄道基督教青年会を設立して（会長は江原素六）、同会の常務理事に就く一方で、[153]その三年後の一一年六月に誕生した廓清会には、創立の準備段階から関わるとともに、運動の牽引的な役割を担うことになったことは、既述した通りであ

る。[154] よく知られるように、廓清会の発起人は、同盟の軍隊慰労事業の責任者であった江原素六であったが、[155] 発足後における益富の献身的な働きをめぐって、伊藤秀吉は、[156] 後に、次のように称えている。曰く、「爾後三四年間は全く益富氏一人の廃娼運動史であると云つても過言でない位、専心努力奮闘を続けた。益富氏は曩に日露戦役の軍隊慰問のため満洲に渡つたが、同地に誘拐されて来る少女救済の必要を認め、大連に満洲婦人救済所を設けて、専ら売淫婦の救済に当つた経験と同情とによつて、廓清会の常務を引受けたのであつて、益富氏あつて廓清会は継続したと云つてもよい」[157] と。

注

(84) 前出、益富『私の歩んできた道』一九―二〇頁。

(85) 日本軍の攻撃を受けてロシア軍は、撤退するにあたって、市街地の破壊を試みたが、実際には、わずかの部分を破損させただけであった。その結果、日本軍は、占領下に置いた建物の多くを、簡単な補修を施すだけで、そのままの形で使用することができた。したがって、湾内の掃海作業が終了するや、軍需物資が続々と陸揚げされて、前線に搬送されることが容易だったのである。

(86) 占領後、軍政委員が大連に足を踏み入れた時、男性四八〇名、女性一四名の計四九四名の密航者がいたという。そのうち四〇名は、芝罘に退去を命じられたが、その他は、通訳に採用された者もあったが、中には、帰還旅費がないために市街を彷徨する者もいた。彼らは、兵站部憲兵に引き渡されたという（井上謙三郎編『大連市史』大連市役所、一九三六、復刻版、大連市史刊行会、一九七二、二三七頁）。

(87) 大連に渡航する日本人には、「大連湾を管轄する軍衛の規則及命令を遵守すること」が義務づけられたが、一九〇五年一月に陸軍省によって「渡航商人規則」が公布されたところ、「我こそ大連先登者となり一攫千金否十百万円も攫まんと鼻息荒く東京へと押上り陸軍省へ願書を出せし者」が、殺到することとなった。この時、申請者の中で最も多くを占めたのは料理店業であったが、最初に営業許可を受領した小倉市の河村啓介が、「許可証を握るや直に小倉に帰り手を八方に分ち遠征婦人の募集」を始めたところ、たちまちにして募集締切りとなったという。応募した女性たちは、「地球を跨にかくる天草技

天を中心とし之に遠賀の炭坑婦北方の白首隊」などであったが、彼女たちが大連に上陸するや、「三軍を叱咤す軍人、世界の商人を以て自任する豪傑も夫れ日本ピーが来たぞと押寄する者恰も一顆の砂糖に蟻の蝟集する如し」といった体たらくを呈した（在大連豊水生「大連の花柳界」『福岡日日新聞』一九〇五・九・六）。

(88) 柳沢遊『日本人の植民地体験―大連日本人商工業者の歴史』（青木書店、一九九九）二五―二九頁。

(89) 前出、倉橋『北のからゆきさん』一三八頁。日露戦争直前の一九〇四年一月の大連における在留日本人は、合計で三〇七人いたといわれるが、戦争終結後の〇六年末には、日本人戸数が一九九三戸、在留日本人の数は八、二四八名にも急増している（前掲、柳沢『日本人の植民地体験―大連日本人商工業者の歴史』二五頁）。しかし、渡航した日本人には、ただ、戦後景気を当て込んだだけの業者も少なくはなく、『万朝報』は、その実態を次のように報じている。「内地渡航者の実体を見に中流以上の資産を持乍ら太だ浅薄な思想を以て営業を始め軍票の買入にて鞘を取るか専売的の特権を利用して軍隊に物品を高く売附ける位が上の部類で十人中八九までは内地より淫売婦を誘ひ来り軍用旅舎とか割烹店とかいふ看板をかけて公然女郎屋を営み遠征の将士に魔剤をかけて悉く其懐を空しくさせる賤劣な商人許りであるは痛嘆に堪へぬ、夫も軍隊引上後其儘業務を継続し移住民に或一種の便を与へるかといふに決して渠等は那麼考慮はなく凱旋将軍士を裸にすれば能事了れりで引揚るのだ（後略）」（「満洲渡航者案内（五）」同紙、一九〇五・九・二五）。

(90) 前出、「姦悪なる此世（戦勝国の裏面）」（『ときのこゑ』第二三八号、一九〇五・一一・一五）二頁。

(91) 前出、在大連豊水生「大連の花柳界」（『福岡日日新聞』一九〇五・九・六）。山室軍平は、この時期の大連における日本人娼婦急増の実情について、次のように述べている。「目下満洲に一万人の醜業婦が日本から入り込んで居り大連の町だけでも芸娼妓、酌婦の如きものを合計すれば実に三千人の多きに達するといふことである。今大連に町に住む日本人は凡そ八九千人であるといへば其三分の一以上、殆んど半数は醜業婦であるといふに至りては実以て心外千万の事であると謂わねばならぬ」（「満洲婦人問題」『ときのこゑ』第二五二号、一九〇六・六・一五、三頁）。

(92) 日露戦争以前の日本のキリスト教の台湾伝道は、一八九五年五月に日清戦争が終結して、台湾が日本に割譲されたことを受けて、翌九六年四月に日本基督教会伝道局から河合亀輔が派遣されて、その年の一一月に台北日本基督教会が設立されたのに始まる。次いで同年一一月に、日本聖公会伝道局から今井壽道が派遣され、九八年四月に日本聖公会台北講義所が開設されているが、残念ながら、この時期の台湾伝道の実証的な研究は、ほとんど手がつけられてはいない。さしあたり、戒能信生「日本教会による台湾伝道の歴史　一八九五年～一九四五年」（日本基督教団台湾関係委員会編『共に悩み共に喜ぶ―日本基督教団と台湾基督長老教会の協約締結のために』日本基督教団、一九八四）が、概要を辿っているに過ぎない。なお、

朝鮮伝道の方は、一九〇三年以降のことであり、翌〇四年に入ると、日本基督教会が釜山で、そして日本組合教会と日本メソジスト教会が、ともに京城で伝道活動を開始している。折りしも、日露戦争の渦中のことであった。

(93) 日本基督教会内に独立した伝道機関として「伝道局」が創設されたのは、一八九四年七月の第九回大会においてであった。これは、それまでの日本一致基督教大会伝道局を改組したものであったが、この時、日本は日清戦争の渦中であり、「此時勢に順応して、伝道上一新機軸を出さん」とする趣旨によるものであったとされる（笹倉彌吉編『日本基督教会伝道局創立廿五年史』日本基督教会総務局、一九一九、一頁）。

(94) 部長には植村正久が就任し、幹事には松永文雄と貴山幸次郎の二名が、そして会計には、石原保太郎と福田錠二が当たっている（前掲、『日本基督教会伝道局創立廿五年史』三〇頁）。

(95) 「日本基督教会の戦時体制」（『福音新報』第四五九号、一九〇四・四・一四）。この活動計画は「伝道局設立第十年紀念」として立案され、戦時伝道部の委員には、大会常置委員と伝道局理事が就くことになった。

(96) たとえば、五月一五日に神田青年会館で開催された「戦時伝道大演説会」は、昼夜の二回開かれ、いずれもが、五〇〇余名の聴衆が集まるほどの盛況であった。席上、井深梶之助の「黄色人種と基督教会」と題した演説が行なわれている（「戦時伝道大演説会」『福音新報』第四六四号、一九〇四・五・一九）。

(97) 周知のように、一八九九年五月末に起こった義和団運動に対して、日本は欧州列国とともに派兵して運動を制圧して（「北清事変」）、その結果、一九〇二年八月に天津に租界地を獲得したが、当時、秋山好古将軍の指揮下で軍務に就いていた日疋は、他の諸国が租界地内に教会を建設していることに刺激され、日本のキリスト教による中国伝道の必要を覚えた。そして彼は、早速、日本基督教会伝道局に対して、同地への伝道に着手するように具申し、これを受けて翌〇三年二月に、伝道局から貴山幸次郎と瀬川浅が派遣されて準備に当たって、三月一五日に天津日本基督教会が創立の運びとなった。日疋は、教会設立後、長老として教会形成に尽力する一方で、天津小学校を開設して、在留日本人の子女たちの教育事業にも力を注いでいる（「北支及満州伝道開始顛末略記（貴山生）」『福音新報』第二一四〇号、一九三七・三・四、及び「天津日本基督教会設立」同紙、第四〇六号、一九〇二・四・九）。日疋は、日清戦争では近衛師団兵站監督として効をなし、既に教界の内外で名を知られる軍人キリスト者であった。彼は、台湾兵站部監督補時代に、一八九五年九月に各派合同の戦時軍人慰労会によって細川瀏が慰問使として派遣された際には、これを助け、翌九六年一〇月に日本基督教会伝道局から大儀見元一郎が台湾教会慰問兼伝道視察委員として渡台した時にも、協力に奔走している。さらに彼は、一八九九年七月の日本基督教会第一三回大会において、浪速中会選出の長老として、植村正久、井深梶之助、押川方義、星野光多、山本秀煌、和田秀豊、稲

垣信らとともに伝道局の委員にも選ばれており（太田愛人・秋山繁雄・岡見璋・寺田登編『大儀見元一郎とその時代―侍から牧師へ・一幕臣の軌跡』新教出版社、一九九四、二二二頁）、天津教会の設立は、伝道局員としての働きの一環であったとも言えよう。

(98) 一行は、新橋駅から出発したが、日疋は、軍隊専用ホームに、引率する部下たちを整列させ、有志の者に讃美歌を歌わせるとともに、青年信者の三松俊平に祈りを捧げさせ、一同で万歳を唱えたという（石井傳一『偉人日疋信亮』警醒社、一九四一、四七頁）。

(99) 鹽澤富太郎編『大連日本基督教会創立沿革史』（大連日本基督教会、一九〇六、佐波亘編『植村正久と其の時代』第三巻、復刻版、教文館、一九七六）三一四頁。丸山伝太郎は、一九〇三年に日本基督教会伝道局から派遣せれて、天津、保定府で伝道活動に従事していたが、日露戦争の勃発を受けて、翌〇四年九月からは、中国語通訳官として営口満倉支庫長金子義友の配属下で勤務することになった。後に貴山幸次郎が回顧したところによると、それまで北海道で開拓伝道に携わっていた丸山が、中国伝道の志を抱いて中国語の研究をしていることを知った植村正久から、彼に対して天津に派遣する旨の指示があり、貴山が交渉した結果、天津日本基督教会の初代牧師として、丸山が着任することになった。しかし、組合教会出身であった彼が派遣されたことを、当時、会員であった日疋信亮は快く思わず、結局、信任を得られない丸山は、赴任して間もなく同教会を辞して保定府に赴き、その後、一層、中国語の研鑽に励んで、他日に備えていたという（前出、「北支及満州伝道開始顛末略記（貴山生）」『福音新報』第二一四〇号）。なお、丸山は、同志社在学中に、同窓であった志方之善、高林庸吉や山崎六郎右衛門、天沼恒三郎らとともに、北海道の瀬棚郡利別原野でインマヌエル村の建設を計画して、卒業と同時に一家を挙げて入植して、インマヌエル教会を設立したが、結局、挫折して、その後、北海道集治監教誨師嘱託として各地を巡回し、一八九七年から一九〇三年までの期間、札幌、旭川、元浦河などの各組合教会を牧している。

(100) 前出、鹽澤編『大連日本基督教会創立沿革史』（『植村正久と其の時代』第三巻）三一四頁。当時は、戦時下であったので、新たに施設を建築することはできず、接収した既存の建物を改修して利用するのが普通であった。たとえば、大連軍政署は、東清鉄道汽船会社の建物を利用しており、満州軍倉庫は、大連では数少ないホテルであった埠頭ホテルを使用していた。したがって、日疋らが集会生活を営むには、この設備は、むしろ好都合な空間であったと思われる。

(101) 前出、『東京キリスト教青年会百年史』にも、一九〇四年一二月に「キリスト教青年会軍隊慰問天幕事業部主事であった聖公会の神学生落合吉之助たちが大連で活動をはじめると、日疋は部下のキリスト者を指導してこれを助けた」と記述されている（同書、一二六頁）。

(103) 前出、「江原素六翁を訪ふ」（『人道』第一巻第三号、一九〇五・七・一五）一〇頁。
(104) 前出、山本編『日本基督教会史』三〇六頁、及び前出、笹倉編『日本基督教会伝道局創立廿五年史』四一頁。
(105) 同建議書の教会規定の「会場」の欄には、「大連浪速町日本基督教青年会軍隊慰労部ニ請フテ当分ノ内同会場ノ一部ヲ借用シ之ヲ会場ニ充ツ」とあり、独立した施設が得られるまでの期間、当面は、それまでと同じように、青年会の軍隊慰労部の建物の一部を借りる形で、礼拝等の教会行事が運営される旨が報告されている。
(106) この年の一〇月五日に開催された日本基督教会第一六回大会には、既に大連教会の創立をめぐる建議書が提出されているが、書類に付されている「信徒名簿」には、日疋を筆頭にして計一六名の氏名が列記されている。それによれば、信徒のうち一四名が、満州軍倉庫本部、大連兵器本廠、野戦鉄道提理部、大連兵站病院、野戦電信班等の軍関係者によって占められており、改めて、教会の構成員が軍人中心のものであったことが知られる。ちなみに、教会が設立されて最初のクリスマスの祝祭が、一二月二五日の夜に開かれているが、この時に招待された人々の中には、大連官衛軍隊長官や大連公議所銀行会社の社員の姿もあったという（前出、『大連日本基督教会創立沿革史』）（『植村正久と其の時代』第三巻、三二一七頁）。
(107) 前出、笹倉編『日本基督教会伝道局創立廿五年史』の「第十三年度（明治三十九年）」の記述には、「本局特派教師石田祐安氏は大連日本基督教会の主任教師として六ヶ月滞在の予定にて一月八日出発せり」（傍点引用者）とある。また、辞任の理由をめぐっては、「氏は満洲伝道義会設立の目的を以て三月上旬突然上京せらる」と記されている（同書、三六頁）。石田が大連を去ることになった経緯について、後年に貴山は次のように述べている。「同氏は三九年早々赴任せられたが着連後、氏は満州にては無宗派教会を設立することが適当ならにとの意見を抱いて、在連僅か二ケ月余にして伝道局には何等の交渉もなく、勝手に大連を去つて京阪に立戻り組合教会の故宮川経輝氏等と意見の交換をなし、帰京の上初めて其意見を伝道局に吐露したるに依り、日本基督教会から公然派遣せられたものが、伝道局本部に何の交渉もせず自由に私見を携へて任地を去る抔とは不都合なりと云ふ訳で、其儘同氏は解任せらるゝことゝなつた」（傍点引用者、前出、「北支及満州伝道開始顚末略記（貴山生）」『福音新報』第二一四〇号）。石田が大連を離れることとなった背景には、満州伝道における「無宗派主義」を標榜して、満洲伝道義会の創立を構想する石田と、あくまでも日本基督教会の傘下における教会の形成を主張する日疋との間の対立があったという（西内藤男「真人石田祐安を懐ふ」『基督教世界』第一二八五号、一九〇八・四・一六）。この間の事情については、田中和男「石井十次を支えた人々—石田祐安と東洋伝道会」（本誌、第四五号、一九九六・一二、後に同『近代日本の福祉実践と国民統合—留岡幸助と石井十次の思想と行動』法律文化社、二〇〇〇、に所収）が触れている（同書、一一二—一一五頁）。石田はその後、しばらく日本基督教会伝道局の巡回牧師として働いたが、結局、彼が願ってい

た満州伝道義会の設立は実現しなかった。その後、石田は、一九〇六年一二月に石井十次とともに東洋伝道会を結成する一方で、家庭伝道運動に尽力することとなるが、病いを得て、一九〇八年一月に急逝した（竹中正夫『土に祈る―耕牧石田秀雄の生涯』教文館、一九八五、三四頁）。

(108) 前出、『大連日本基督教会創立沿革史』（『植村正久と其の時代』第三巻）三一七頁。『石井十次日誌』によれば、前年の一九〇五年一二月二〇日に、石井のもとに大塚素が訪問して、同盟の軍隊慰問活動のために、大連と柳樹に音楽隊を派遣することを依頼しているところから（「石井十次年譜」同志社大学人文科学研究所編『石井十次研究』同朋舎、一九九九、一二二頁）、岡山孤児院音楽幻燈隊に対する寄付は、これを支援する目的であろう。提案したのは、かつて石井の働きに協力した経緯もある石田祐安かもしれない。ちなみに、石田は、一八九二年に日本基督教会伝道局から岡山に派遣され、翌九三年一一月に結成された岡山基督教伝道義会には彼も関わり、『岡山基督教』、『岡山孤児院新報』等の機関紙の編集にも従事している。

(109) 前掲書、三一八頁。

(110) 山室軍平「満洲の醜業婦」（『ときのこゑ』第二四七号、一九〇六・四・一）六頁。

(111) ここで山室が言及している「英国宣教師ウオータース」は、この時期に奉天で活動していたスコットランド長老教会宣教師のジョン・ロスの誤認であろう。ロスは、当初、営口で慈善病院を設立する目的で、適当な地所を購入していたが、一時帰国することになったため、留守の間、一人の中国人に、その土地の管理を委嘱していたところ、戻ってみると、そこには、日本人経営の遊廓が建てられていた。このことを知ったロスは激怒して、ただちに退去を求めたが、業者の側は頑として受けつけなかった。しかもこの遊廓は、既に営口民政署からの営業許可まで取り付けており、結局、ロスはやむなく、和解金として地代六八〇円が支払われることに同意した。そうした折りに、知人から救済会設立の計画を聞き及び、これを同会の活動基金として寄付することにしたという（前出、益富「其頃の思ひ出」大連慈恵病院編『二十年記念沿革史』一二頁）。なお、ロスの中国、及び朝鮮伝道については、竹森満佐一『満洲基督教史話』（新生堂、一九四〇）に、若干の記述がある（同書、五九―七三頁）。

(112) 『遼東新報』は、東京で新聞『日本』に勤めた経歴のあった末長純一郎が、一九〇五年一〇日に創刊した日刊紙で、当時、大連における唯一の邦語新聞であった。同紙の報道姿勢は、「不偏不党、国家本位を編集方針に定め、満蒙開発を其の理想」とするものであり、関東都督府の広報などに協力しながらも、民間紙の立場を守っていた。しかしその後、満州における新聞、及び印刷事業の発展に目をつけた満鉄初代総裁の後藤新平は、この新聞を買収しようと画策することもあったが、結局、

その目論見は、『遼東新報』側の抵抗にあって断念した。それでも、満蒙開拓の指針を示す役割を担う有力紙を作りたいと考えた後藤は、新たに、東京印刷社長の星野錦一に協力を要請し、一九〇七年一一月に、満鉄の経営による『満州日日新聞』の創刊にこぎつけたのであった。この間の経緯については、李相哲『満州における日本人経営新聞の歴史』（凱風社、二〇〇五、五三―六三頁）が詳しい。なお、『遼東新報』は、現在、国内で所蔵している図書館・研究機関はなく、中国大連図書館に、一九〇五年一〇月二五日付から一九二七年一〇月三一日付までが所蔵されている。残念ながら、筆者は未見であるが、それらの記事を通して、救済会の活動に関する、より詳細な情報を得ることが可能であろう。

(113) 後に、山室が述懐しているところによれば、女性たちを収容する施設面については、一軒の借家をして、これに充てている（山室「満洲に於ける婦人救済」『廓清』第二巻第六号、一九一二・六、三〇頁）。

(114) 益富の回顧によれば、柴田が救済会に顔を見せない日はほとんどなく、時には京人形を持参して、収容されている女性たちを楽しませていたという（前出、益富「其頃の思ひ出」大連慈恵病院編『二十年記念沿革史』一六頁）。

(115) 在大連豊水生「大連の花柳界」（『福岡日日新聞』一九〇五・九・八）。

(116) 後年になって関係者が回顧したところによれば、遊廓地を市の郊外に設営した目的は、「これは何うしても商業地区と少し離れた箇所に置かなければ風紀取締、或は衛生の方面から云つても都合が悪いと云ふことで、その当時現在の逢坂町、これは山の陰の一寸人離れして居る、で遊廓として指定しても大丈夫である」との、隔離対策としての意味合いが強いものであったという（傍点引用者、前出、井上編『大連市史』三〇七頁）。

(117) 大連における公娼制度の導入については、竹村民郎『大正文化帝国のユートピアー世界史の転換期と大衆消費社会の形成』（三元社、二〇〇四、一七七―一八二頁）、前出、同「公娼制度の定着と婦人救済運動―二〇世紀大連において」（『環』第一巻第一〇号）、前出、同「公娼制度成立前後―二〇世紀初頭の大連の場合」（『アジア遊学』第四四号、二〇〇二・一〇）を参照されたい。

(118) 「大連の遊廓（一）」（『満洲日報』一九〇七・一二・二七）。また、期せずして同日付の『満州日日新聞』にも、逢坂町遊廓の沿革についての記事がある。そちらによると、「当時は軍隊引揚の期間であつたから市中は到る処アンペラハウス多く熾むに密売婦が出没して居たので若し軍隊が之等の醜業婦（ママ）に接したなれば忽ち怖る可き病毒を感染する之には神尾氏も閉口した結果が一方に公然遊廓を構へさせ一方に例の西風を吹かせてドシ〳〵醜業婦（ママ）を狩り立てたから逢坂町は自然の勢で発達の緒に就いたのだ」とあり、やはり、同遊廓の設置の目的が、性病対策に置かれていたことが看取される（「遊廓逢坂町」同紙、同日）。

(119) 逢坂町遊廓に先だって、前〇五年の三月に営口で、軍政署によって「宿屋営業取締規則」と「旅舎料理屋下婢取締規則」が発布されている。これらの規則の意図されたところは、跳梁する売春業者たちを、軍政署の管轄下で統制することであったが、それにもまして重視されたのは、駐屯兵の性病の蔓延を防止することであった。このことは、規則の制定に先だつ形で、この年の一月に、「専ら醜業婦の健康診断を行ひ、且つ其の患者を入院せしめて、治療を施し、花柳病の伝播を予防」することを目的に、「婦人病院」が開設されていることによっても明らかである。

(120) 既に一九〇四年一二月二八日に、遼東守備軍司令官西寛二郎によって公布された「青泥窪衛生委員会業務規定」には、「公娼」に関する項目があり（第二条）、また、この時期に制定された「大連娼妓営業取締規則」には、検梅に関する規定が盛り込まれている（第一〇条）。とすれば、大連における公娼制度の導入は、軍主導のものであったことが示唆されよう。当時の大連市街の様子を、一軍医は次のように回顧している。「（前略）宿営地の中でも最も厄介であつた問題は、乗船地区たる大連市街の急速なる発展に伴ふ売春婦の増加であつた。（中略）当時売春婦の数は判つたものだけでも二千余人に上り、同地軍政署に於ける衛生業務は此の方面の事に忙殺さるゝ程の状況であつた」（安井洋「日露戦に於ける遼東兵站衛生業務の回顧」『日露戦役戦陣余話』陸軍軍医団、一九三四、三五一―三五二頁）。

(121) 前出、益富「廓清会創立の所感」（『廓清』第二六巻第一〇号）八頁。

(122) なお、大連で組織的な廃娼の動きが起こったのは、時期的には下って、一九一九年のことであった。

(123) (124) (125)「満洲婦人救済会」（『婦人新報』第一〇九号、一九〇六・五・二五）三―五頁。なお、同趣意書の末尾には、本部の設置場所について、「清国大連浪速町青年会内」と記載されている。

(126) (127) (128)「満州婦人救済会現況」（『婦人新報』第一一〇号、一九〇六・六・二五）一九―二一頁。

(129) 救済会に収容された女性たちの手になる裁縫物や造花、手細工などは販売に供されたが、それらの仕立料は「木綿単衣二十銭より五〇銭、絹物五〇銭より一厘、口物五十銭より七十銭、羽織五十銭より一円、袴類四十銭より一円程の程度」の比較的廉価のものであって、「仕事は絶たる事がない」と、すこぶる好評だったようである。それらの収益は、彼女たちの生活を支える運営費に当てられた。

(130) 益富「此罹災者を救へ（下）」（『廓清』第一巻第二号、一九一一・八・一）四四―四五頁。

(131) 益富「故愛田村夏子」（『婦人新報』第一二二号、一九〇七・六・二五）一〇―一四頁。なお、彼女の身上については、倉橋正直『からゆきさんの唄』（共栄書房、一九九〇）が紹介している（同書、一五五―一六三頁）。

(132)「断腸の曲」（『福岡日日新聞』一九〇六・九・一二）。

(133) 益富「此罹災者を救へ」(『廓清』第一巻第一号、一九一一・七・八)三五頁。後年になって、山室軍平も『弱者の友』(一九一一、救世軍本営・警醒社書店)の中で、この女性のことを紹介している(山室武甫編『山室軍平選集』第六巻、「山室軍平選集」刊行会、一九五二、二一頁)。

(134) 「満州婦人救済演説会」(『婦人新報』第一一〇号、一九〇六・六・二五)七—八頁。なお、この演説会で、救済会を代表して演説を行なった西内天行は、この年の一月に、救済会に収容されていた三名の女性たちを連れ帰り、神戸女子伝道学校のパロス校長の斡旋で、彼女たちの身柄を神戸救世軍小隊に預けるとともに、六日には神戸教会で、次いで一五日には岡山教会で演説を行なっている(「婦人救済会運動」『基督教世界』第一一八二号、一九〇六・四・二六)。

(135) (136) 「満洲婦人問題」(『ときのこゑ』第二五二号、一九〇六・六・一五)三頁。

(137) 後年になって益富は、往時を次のように振り返っている。「当時の私の任務は、基督教青年会幹事であつたから、幹事の仕事として、かうした方面の婦人の救済と云ふことが不似合でもあり、東京には大きな仕事があつたから、大連を去らなければならなく余儀なくされた。その時に山室中将に手紙を書いて、この事業を引受けてくれないかと申込むと、心より引受けて下さつて、矢吹氏を派遣され、救済事業は救世軍の手に移された。是は又一面には救世軍の満洲への進出の契機ともなつた」(前出、益富「廓清会創立の所感」八頁)。

(138) 前出、「満州婦人救済演説会」(『婦人新報』第一一〇号)八頁。なお、山下明子氏は、満州婦人救済会が救世軍によって開設されたとの記述をしているが(山下「日帝下の日本女性史とキリスト教」『戦争とおんなの人権—「従軍慰安婦」の現在性』明石書店、一九九七、九九頁)、明らかな事実誤認である。

(139) 救世軍が、すぐに対応できなかったのは、この時期、出征軍人家族、及び遺族に対する慰問救護活動をはじめ、帰還兵の就労斡旋のための「労働紹介部」の開設、さらに、この年の春に東北三県を襲った凶作のために窮乏に陥った農村の子女たちを救済する「女中寄宿舎」の設置など、課題が山積していたことによるものであろう(秋元己太郎『日本における救世軍七十年史』第二巻、救世軍出版供給部、一九六六、六—七頁)。

(140) 井深「満韓旅行談」(『開拓者』第一巻第九号、一九〇六・一〇・一)三七—三八頁。

(141) 前出、『沿革史』(佐波亘編『植村正久と其の時代』第三巻、復刻版)三一三—三一九頁。なお、倉橋正直氏は、慈恵病院の設立が、益富によるものであったとしているが(前出、倉橋「満洲婦人救済会と益富政助」四八頁)、事実認識としては必ずしも正確ではない。

(142) 前出、井深「満韓旅行談」三八頁。

(143) 前出、『沿革史』（『植村正久と其の時代』第三巻、復刻版）三二〇頁。

(144) ちなみに、益富は、救済会が保護した女性の総数をめぐって、「大連に滞在して居る間に、七十四人のかうした婦人を救済した」と述べる一方で（前出、益富「廓清会創立の所感」『廓清』第二六巻第一〇号、八頁）、戦後になって、「丁度六十四人まで救済し」と回顧してもおり（前出、益富『私の歩んできた道』二一一頁）、記憶が一定してはいない。

(145) 「満洲だより」（『ときのこゑ』第二六二号、一九〇六・一一・一五）三頁。

(146) 救世軍婦人救済所は、後に大連婦人ホームと改称されたが、同ホームにおける山田の働きについては、倉橋正直『北のからゆきさん』（共栄書房、一九八九）が、簡略ながら辿っている（同書、二三四―二三九頁）。また、「内地」に戻った山田は、翌一一年の廓清会の創立にも関与し、救世軍を代表して、矢吹幸太郎とともに本部理事にも就いている。

(147) この翌一〇月に富士見町教会で開催された日本基督教会第二〇回大会において、「特別伝道」に関する決議がなされ、全国の主要七〇余所で集中伝道活動を展開することになり、この集中伝道の実施の前後に独立した八教会の一つとして、大連教会が挙げられている。また、新たに伝道地に加えられた七ケ所には、「朝鮮群山、支那（ママ）安東縣、奉天、遼陽」の四都市も指定されている（前出、山本秀煌『日本基督教会史』三〇六―三〇七頁）。在満の大連、奉天、旅順の三教会によって満洲中会が設立されたのは、この六年後の一九一二年六月のことであった。

(148) その後、大連基督教青年会は、組織を拡充するとともに青年会館の建設にも取り組んで、一九一一年四月一八日に竣工、及び開館式を挙行している。この青年会館の建設にあたっては、軍隊慰問使として渡満したこともある同盟の名誉主事のシービーやヒッバードが、民政署長の関屋貞三郎に対して、「純潔なる青少年の修養及社交機関」の設置が急務であることを提言し、工費五万円を投じて実現したという（前出、井上編『大連市史』七五五頁）。また、同会の理事には、同盟軍隊慰労部の総主事であった大塚素も名を連ねているが、当時、彼は、一九〇九年一一月から江原素六の推挙で満鉄に入社し、慰藉係主任として勤務していた。

(149) 後年になって柴田は、慈恵病院の経営を請け負うことになったゆきさつを、次のように振り返っている。「僕は其頃遼東新報記者として勤務の傍ら慈恵病院を経営して居た、新聞記者としての傍ら病院を経営して居たと云ふ事はチト妙であるが病院とは名ばかりで只今の浪速町扇芳ビルの裏手に三十坪ばかりの赤煉瓦建平屋が一軒あつた、其家に明治三十九年九月一日基督教慈恵病院と云ふ看板を掲げ婦人救済所に収容したる病人を三四人収容し比較的健康なる婦人二三人連れ来たり看護人として使用し開業医の市瀬忠次郎氏が時々来て診察すると云ふ様な至つて小規模であつた、勿論市瀬医師も無報酬で、一箇月の経費も百五六十円の程度であつた」（柴田「山田君と僕」柴田編『山田弥十郎氏記念誌』非売品、一九三九、一〇三

頁）。

(150)「第拾壹年大会」（『ときのこゑ』第二六三号、一九〇六・一二・一）三頁。

(151)「満州婦人問題演説会」（『婦女新聞』第三九七号、一九〇七・一・一六）。この演説会の弁士は、益富の他に山県五十雄、服部綾雄、石川安次郎らであったが、山室軍平も、救世軍を代表して「醜業婦救済論」の論題で演説し、改めて事業活動に対する協力を求めている

(152)明治学院『同窓会名簿』の益富の欄による。ただし、彼が明治学院を卒業した経緯については、判然としない。益富自身の述懐によれば、「再び明治学院に学び卒業しました」とあり（前出、内藤編『伝道第一の人益富政助先生―遺稿と追想録』五頁）、また、先述した明治学院『神学部学籍簿』にも、「卒業後居所」として「神田基督教青年会鉄道部幹事」との記載があるので、明治学院を卒業したことは間違いないが、同学籍簿には「退学年月明治三十八年」との記載もある。考えられることは、益富は、戦時下ということもあって、同盟の軍隊慰労事業に参加するに当たって、一旦、明治学院を中退する手続をした上で戦地に赴き、帰還後に復学したのではなかろうか。ちなみに、一九〇七年六月一日に行なわれた神学部卒業式の次第を報ずる『福音新報』の記事には、卒業生七名の中に彼の氏名は見当たらない（「明治学院神学部卒業式」同紙、第六二三号、一九〇七・六・六）。なお、この年の一二月二四日のクリスマスイヴに益富は、宮本きのと富士見町教会で結婚式を挙げている。両者は、それまでまったく面識がなかったようであるが、井深梶之助の懇親な奨めで、結婚に踏み切ったという。司式は植村正久が行ない、媒酌人は井深夫妻が務め、祝辞は江原素六と山室軍平が寄せている（益富「吾妻が残せる教訓十一ヶ条」前出、内藤編『伝道第一の人益富政助先生』三六頁。益富は、自分の結婚日が「明治四十一年十二月二十四日」としているが、これは記憶違いであろう）。

(153)鉄道青年会設立の経緯は、『福音新報』によると、「青年会同盟委員長井深梶之助氏、東京青年会人々会長江原素六氏を始め、帝国鉄道県庁、東京電気鉄道の重なる人々によりて発起」され、その運営は、「独立経営にて日本の青年会事業中全く外国に資金を仰がずして成立せるものの第一」のものであった。設立の目的として、「鉄道其の他之に関係ある事務に従事する青年の間に基督教の主義精神を以て其の風紀道徳智識身体の各方面に亘りて改善発達を図る」ことが掲げられ、鉄道関係の青年たちの修養に資するために、講演会、研究会、読書会、慰労会などを開催することが計画されている（「鉄道青年会の成立」同紙、第六号、一九〇七・一〇・一）。なお、発足にあたって益富は、その経緯を披瀝するとともに、「設立趣意書及会則」の全文を紹介する文章を、『開拓者』に寄稿し、支援を呼びかけている（益富「鉄道青年会の設立に就て」同誌第三巻第一二号、一九〇八・一二、五三―五五頁）。

(154) 既述したように、廓清会の創立後、一九一一年八月に万国廃娼同盟ロンドン支部のグレゴリーが来日して、政府当局者との意見交換に臨んだが、同月一四日に山室、グレゴリーは、益富とともに陸軍省医務局に赴いて、森軍医総監と会見している。この時に斡旋の労をとったのは、日疋であった（「廓清会紀要」『廓清』第二巻第一号、一九一二・一・一、四三頁）。

(155) ちなみに、廓清会の本部事務所は、翌一九一二年に神田美土代町三丁目の日本基督教青年会同盟会館に設置されている。

(156) この伊藤もまた、満州で「からゆき」の救済に関わった経験の持ち主であった。満州時代の彼については、竹村民郎「大連廃娼事始め（下）―明治社会事業の一齣」（『北葉』第二八号、一九八二・三）が、長男の伊藤秀文氏からの「聞き書き」に基づいて素描している。それによると、大要、以下のようであった。伊藤は、一九〇五年に早稲田中学校夜間部を卒業後、渡満して関東都督府女監、及び民政者監獄署に勤務し、〇七年六月に満鉄社員となった。翌〇八年に島田三郎と安部磯雄が、満洲における日本人娼婦の実情を視察するために大連を訪れた際に、保護した女性たちの世話を伊藤に委託したのを機に、彼は、妻のきんとともに、習字や裁縫を教えるなどして、彼女たちの更生に取り組むこととなり、一時は、自宅に収容した女性が二〇数名にも及ぶほどであった。しかし、生活上の難儀も重なって、これを見かねた満鉄の幹部は、新たに大連高等女学校を設置して、女性たちをそちらに移すことにしたが、同校の経営方針に対して不満を抱いた伊藤は、結局、満鉄を退職して、大連を離れることにした。国内に戻った彼は、しばらく郷里の福岡県久留米市で過ごしたが、その後、島田三郎の斡旋で、益富が設立した鉄道青年会に奉職するとともに、彼とともに、創立段階から廓清会にも参加している。ちなみに伊藤は、後に、当時をめぐって、「余は廓清会創立当時その機関雑誌『廓清』の記者兼書記として就任し、益富氏の指導下に廃娼運動の実務を擔当し、島田会長と益富氏の訓練によつて漸く独り立ちが出来るに至り」と、島田と益富の感化があったことを述懐している（伊藤、前掲書、二二〇頁）。なお、竹村氏は、伊藤が大連を離れることを決意したのが、一九一二年頃としているが（前掲誌、六〇頁）、右記のように、彼は、その前年七月の創立の段階から廓清会の運営に関与しており、符合しない。なお、時期的には下るが、廓清会事務所は、一九二三年九月の関東大震災で同盟会館が焼失した際に、小石川区大塚仲町の伊藤の自宅に移されている。

(157) 伊藤『日本廃娼運動史』（廓清会婦人矯風会廃娼聯盟、一九三一）二一八頁。